

第137回山口西田読書会（2017年3月18日）

第136回（2017年3月11日）のプロトコル（参加者は12人）

【テキスト】西田幾多郎『善の研究』第4編「宗教」第3章「神」の第8段落より第9段落前半

1) 第8段落 以上論じたように――

第8段落で西田は純粹経験に照らして神が何であるかを述べる。純粹経験の状態において「我々の心は最も神に近づいて居る」とし、その神は「宇宙を包括する純粹経験の統一者」であるとする。

このような理解に立てば、次のような先人たちの言葉の意味にも迫ることができるとある。

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| ・アウグスチヌス | 神は不変的直観を以て万物を直観する
神は静にして動、動にして静 |
| ・マイスター・エックハルト | 神性 (Gottheit) |
| ・ヤコブ・ベーム | 物なき静けさ (Stille ohne Wesen) |

また段落後段で、その意識の統一のありさまを次のように述べている。

変化の上に超越して湛然不動
変化はこれより起こる
動いて動かざるもの

さらに別の観点から次のような説明を補足する。

知識の対象とならない
すべての範疇を超越する
定形を与えることができない
万物はこれによって成立する

そして再度、ベームを引用している。

- | | |
|----------|-----------------------|
| ・ヤコブ・ベーム | 天は到る処にあり、汝の立つ処行く処皆天あり |
|----------|-----------------------|

2) 第9段落 或る人はいうであろう――

第9段落は批判を想定してこれに答える形式をとっている。神が宇宙の本質と同じなら、人格のないものになって、とても祈る気持ちになれないとの批判である。ここで「或る人」の主張がどこまでか問題になり、課題として残った。具体的には「かかる神に対して」からが西田説か、「しかしヘーゲルなどのいったように」からが西田説かが問題になる。

3) 哲学的問い

神（仏）は祈る（拝む）側にあるのではないか。

宗教は神と人との関係である（4-2-1）から「祈るもの」の存在が不可欠である。宗教があるかぎり、神はどこまでも祈る側にあるのではないか。真実在のまえに宗教は意味をなさない。神（仏）と真実在をほんとうに同一視してよいか。

（報告、岡部）